
番外だよ！全員集合！！

ゆうたんぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外だよ！全員集合！！

【Nコード】

N8252S

【作者名】

ゆうたんぺ

【あらすじ】

この小説は、バスニグシリーズの番外編集です。初めに前作『バカとstrikersと不要者とグレン団と・・・多すぎる(汗)』を見る事をお薦めします。

はじめに

トウガ

「この小説は、バスニグシリーズの番外編集です。」

あさひ

「第1作品目の『バカとstrikerと不要者とグレン団と・・
・多すぎる(汗)』の過去話や幕間、第2作品目の『仮面ライダー
始めてみました。』のその後のお話(こっちは完結後に出す予定)、
そして作者が思いつきでできたお話などを出します。」

リュウガ

「なのでまずは、第1作品目と第2作品目を見る事をお薦めするぜ。」

「

ライ

「感想、メッセージ、その他諸々もお待ちしてます。それではバス
ニグシリーズ番外編集、『番外だよ! 全員集合!』の—————」

トウガ・あさひ・リュウガ・ライ

「「「はじまりはじまり〜」！」
「
「
「

コータ

「っておーい！？俺の分のセリフは！！？」
「

はじめに（後書き）

はい始まっちゃいました、バスニグシリーズ番外編集小説『番外だよ！全員集合！！』。

梶原トウガ達のカオスなお話、どうぞお楽しみ下さい。

番外1番「最初にこのお話ってどうなんですか・・・byクルス」(前書き)

このお話は、オリエンテーリング大会から数日後の事。

番外1番「最初にこのお話ってどうなんですか・・・byクルス」

＜トウガ視点＞

皆さんこんにちわ、梶原トウガです。今日はクルスと一緒に弁当を屋上で食べる事に（他のみんなは食堂で学食）。そして屋上のドアを開けて、自分とクルスを待っていたのは・・・

青い空、白い雲、光り輝く太陽。そして・・・

雄二

「明久！バカな真似はやめろ！！」

ムツツリーニ（康太）

「…………早まるな!!」

明久

「止めないで二人とも!!」

屋上のフェンスを越えて今にも飛び降りそうな明久と、それを止める悪友二人。

トウガ

「…………うん、絶好の弁当日和だ。（笑）」

クルス

「トウガさん、そこで笑うのはおかしいですよ!! 普通ここはビツクリする所でしょ!? それからそんな弁当日和は絶対無いですから!!!! あっても食欲無くしますよ!!」

うん、今日のツツコミも一段といいね。イイモン見せてくれたお礼におかずを一つあげよう。

クルス

「いやおかずなんていいですから明久さんの自殺を止めましょうよ
」！！」

明久

「いいんだクルス君！もうどうしようもないんだ！！」

トウガ

「まあ落ち着け明久、何があった。（もぐもぐ）」

明久に何が起こったのか問いかける自分。……弁当を食べながら。

クルス

「トウガさん、聞く気あるんですか？」

明久

「……知ってしまったんだ。」

トウガ

「何を？（もぐもぐ）」

明久

「ひ……秀吉に、……秀吉に彼氏が……！！
（泣）」

「……えー？そんな理由で自分の命を断とうとしてんの？良く
見ると雄二とクルスも呆れた顔してる。」

ムツツリーニ

「……そうか明久。……そうかそうか。」

そんな中、ムツツリーニ一人が明久に同情（？）している。

ムツツリーニ

「……………ちょっと、横詰めてくれ。（泣）」（ガシヤガシヤ）

明久

「うん。」

雄二

「おいしいい！ムツツリーニイイイイイ！！？」

クルス

「あなたもですかー！ー！！？」

そしてムツツリーニも自殺志願者に。

雄二

「あのなあお前ら！そんなバカな理由で飛び降りられる秀吉の気持ちを少しは考えろよ！！」

クルス

「そうですよ！」

明久

「HDDとか残して大丈夫？」

ムツツリーニ

「……もういい、もはや後願に憂いなし。」

雄二

「聞けよクズ共!! (怒)」

雄二とクルスの話を全く聞かないバカ二人。

明久

「うん、わかってるよ雄二にクルス君。」

と思ったら聞いてたようだ。

明久

「でもね、ゆるせないんだよ。こんなシナリオを描いた――――」

神が!!!」

いつもバカだバカだと思っていたが、まさかこれ程までとは・・・

明久

「ムツツリーニ、今から一緒に二人で神様を殴りに行こう。」

ムツツリーニ

「・・・・・・神か、男を作ったつまらん奴。」

・・・・・・なんかもう、めんどくさくなってきたな・・・

雄二

「どうせいつもの勘違いなんだろう？」

雄二も自分と同じ事思ったのか、そんな事を呟いた。

明久

「な！僕は見たぞ！！この目でしっかり秀吉も「・・・・・・止めろ！明久！！！！」！？」

明久が証明しようと説明するが、それをムッツリーニが止める。

ムッツリーニ

「……男がここまで決意して事を起こそうとしているんだ、それだけで証拠なんて十分。」（泣）

明久

「ムッツリーニ！！」（泣）

雄二

「はあ、その秀吉の彼氏ってヤツをどうかしよと思わないのか？」

トウガ

「そうだな、それをすれば万事解決じゃないか。」

ムッツリーニ

「……バカ野郎！雄二とトウガ！！」

明久

「そんな秀吉を悲しませるようなゲスな事、僕達が出来ないじゃないか！！秀吉の幸せは僕達の幸せなんだから！！！！」

・・・・・・・・だったら自殺しないで祝福しなよ。

ムツツリーニ

「・・・・・・・・情けも分からぬ冷血動物達め。」

明久

「雄二達には無いかもしれないけど、僕達には心っていう繊細な器官があるんだよ。」

ムツツリーニ

「・・・・・・・・そうか、だから霧島翔子や飛鳥あさひになびかないのか。」

明久

「え？僕はてっきりそちの気があるのかと・・・・・・・・」

カチン！×2

雄二・トウガ

「死ねゴルアアアアア！！！！（激怒）」（ドガシャアアア！！！！）

クルス

「ちょっ！お二人さん！！？」

さすがの自分も堪忍袋の尾が切れて、フェンスごとバカ二人を蹴りつける。

ムツツリーニ・明久

「「ぎゃあああああ！！！！」」

そして二人はグラウンドへ向かって落っこち—————

ムツツリーニ・明久

「「殺す気か!!?」」

クルス

「うわ!?!生きてた!?!?」

なかった。くそ、しぶといな。

雄二

「死にたかったんじゃないのかよ。……チツ。」

クルス

「坂本さん、今舌打ちしませんでしたか? (汗)」

明久

「あのね雄二、さっきから勘違いしてるみたいだけど別に死ぬ訳じゃないから。」

雄二

「あ!?!ならなんでそんなトコにいんだよ?」

全くだ。自殺のなにもんでもないのに……

明久

「なんでってそりゃ————」

明久

「人生リセットしてセーブ地点まで戻るために決まってるじゃん。」

雄二・クルス・トウガ

「「「・・・・・・・・」」」

明久

「ムツツリーニはどこでセーブしてる？次僕は『秀吉結婚ルート』狙いでいこうと思ってるんだ。」

ムツツリーニ

「・・・・・・・・どうもスキップされて、記憶からなくなってる秀吉と
のプール編。」

明久

「いいなあ、僕そのCGうまってないんだよね・・・・」

雄二・クルス・トウガ

「「「もう駄目だこいつら・・・・・・・・」」」

そう自分達がおもっていると――――

バン！！

屋上のドアが勢いよく開かれ、誰かが入って来た。

秀吉

「もう我慢ならん！いい加減にせぬか！わしに彼氏などおりはせんは！！」

ムツリニ・明久

「マイエンジェル「秀吉！！！！」」

今回の事件の原因、『木下秀吉』本人だった。

秀吉

「ドアの向こうで聞いておれば、たわけた事ばかり・・・」

明久

「とぼけないで！僕は見たんだ！！昨日秀吉が、男と腕組んで歩いてる姿を！！」

トウガ

「じゃあお前は相手の顔を見たのか？」

自分がそう問いかけると、明久は自分から目を逸らす。

雄二・トウガ

「「やっぱりか。」」

明久

「いやね、現実には怯えて顔までは・・・」

秀吉

「というか、なんでお主らはワシに彼氏が出来た事を前提で話しておるのじゃ・・・」

トウガ

「あー確かに。秀吉に彼女がつて線はないのかな？」

自分がそう言うと、ムツツリーニと明久が固まった。

明久

「秀吉に彼女？」

ムツツリーニ

「…………女同士…………っ!!!(ぶしゃああああ!!!)

」

ムツツリーニは何かを想像したのか、凄い勢いで鼻血が噴き出して倒れた。

明久

「ムツツリーニ!!」

ムツツリーニ

「…………だがまだ死ねぬ!秀吉のあで姿を拝むまでは!!」

雄二

「で、真相の方はどうなんだ秀吉。」

秀吉

「よいのか…………アレを放っておいて。」

そう言って、秀吉が明久達の方に指差す。

明久

「誰かー！ムッツリーニを助けて下さーい！！後一枚かまして！！」

トウガ

「いつもの事だしいいんじゃない？」

クルス

「何気にひどいですね、トウガさん。（汗）」

キコエマセンナー。

|||||||秀吉、昨日の出来事説明|||||||

昨日は姉上（木下優子）の服を着て、路上で演劇の練習をしておっ
たら・・・

優子

「秀吉、ちょっと来てくれるかしら？」

秀吉の真後ろに、いつの間にか木下優子さんがいた。

秀吉

「あ、姉上・・・今は友人を助けるための方便あつて「ほほほほ」（ガシッ!）」

秀吉の説明を無視して、木下優子さんは秀吉の腕を掴んで屋上から出て行こうとする。

秀吉

「じよ、ジョーク! ジョークじゃ!!! ジョークなのじゃ!!!」（汗）

そしてついに屋上のドアから出て行き、

バタン!

ドアは閉まって…………

『あ、姉上！！関節はそっちに曲がるようには――――』

明久・クルス・トウガ
「……………（汗）」

雄二
「……………明久、こっち来るか？」

明久

「あ、はい。」（ガシャガシャ）

そうやって明久が、フェンスをよじ登って戻って来た。まあ、とにかく自殺は免れた。

明久

「それにしても、女性って何故かああいう技能が卓越してるよね。あの腕を組む隙の無さは一体・・・」

トウガ

「女性だけの授業で学んでんじゃね？」

雄二

「まあいいじゃねえか、組むくらい。」

クルス

「? どういう事ですか？」

雄二

「翔子なんか、更にくつわと手錠とスタンガン常備、家に帰れば専用の監禁室まで用意してる程だ。それに比べりゃ可愛いもんだ。」

トウガ
「
・
・
・
・
・
」

雄二
「
・
・
・
・
・
」

明久
「
・
・
・
・
・
」

クルス
「
・
・
・
・
・
」

しばしの沈黙。
・
・
・
・
・
そして、

雄二
「
・
・
・
・
・
」 (ガシャガシャ)

フェンスをよじ登る雄二。

明久

「雄二！バカな真似はやめろ！！！」

クルス

「ちょ、今度は坂本さんが自殺志願ですか！！？」

雄二

「止めないでくれお前ら！！リセットさせてくれ！今度はもう少しましなルートを選ぶんだ！！！」（泣）

うん、もう疲れた。弁当食べきってないし、さっさと食って教室に戻ろう。

クルス

「いやトウガさん！！お願いですから止めましょうよ！！！」

番外2番「もう、あいつの家には行きたくねえ！b yリユウガ」(前書き)

このお話は、プールでバカやったFクラス達のお話です。

追伸…今回、主人公は出ません。^{トウガ}

番外2番「もう、あいつの家には行きたくねえ！byリュウガ」

<リュウガ視点>

6月、ついに暑い季節がやってきた。その日俺は、明久と雄二、それからライ坊と一緒に明久の家でゲームをする事になった。そして俺と明久がゲームで熱中してる間、雄二は風呂でシャワーを浴びようとしていた。ちなみにライ坊は昼寝中。

明久

「あ、そうだ雄二。」

雄二

『あああああああああああああ！！！！！』

明久が何か言いかけたが時すでに遅し、風呂場で雄二の悲鳴が響いた。

明久

「今ガス止められてるから水しか出ないよ。」

雄二

「早く言えやコラ!!」

タオルを腰に巻いて、明久の隣で怒鳴る雄二。てかいつのまに？

明久

「ごめんごめん、まずは心臓から離れた手足に先に掛けてから徐々に心臓へと————」

雄二

「誰が冷水シャワーの浴び方を言えと言った!!」

明久

「何熱くなってるのさ?・・・あ、そうだ!冷たいシャワーを浴びて冷静に————」

リュウガ・雄二

「「浴びたから熱くなってんだポケェ!!」(怒(だろ?))」

|||||

雄二

「ったく、ガスは止められてるは食うもんなんにもねえは、どうやって生きてんだお前？」

服を着なおした雄二は、来る前にコンビニで買ってきた昼食の入った袋を取り出しながら、そう明久に問いかける。

明久

「失礼しちゃうなく、なんにも無いって事はないよ?ちゃんとカロリーになるものはあるよ。」

リュウガ

「それがあれか？」

そうやって俺が指差したのは、テーブルに置いてある『砂糖』と『サラダ油』だった。

雄二

「俺はサラダ油を飲む趣味はねえ。冷蔵庫だって空っぽじゃねえか。」

そうやって雄二は冷蔵庫のドアを開ける。

明久

「失礼だなく、空っぽじゃないよ！」

雄二

「いいからこれで頭冷やせ。」

そうやって雄二が冷蔵庫から取り出したのは、『熱さ〇シート』。
どうやらあれだけみたいだ。

|||||

その後ライ坊が目を覚まし、俺達も昼食を取り出す。

雄二…コーラ・コーヒー・カップめん・冷やし中華

ライ坊…カレーパン・おにぎり（ツナ2つ）・メロンソーダ・アイ
ス（ガリ○り君）

俺…サイダー・牛焼肉弁当・カップ焼そば・ポテチ（Wコンソメ）

明久

「で、雄二達は何食べんの？」

雄二

「コーラとコーヒーとラーメンと冷やし中華。」

ライ坊

「もちろん買ってきた物全部いただきます!!」

リュウガ

「米粒一つも残さずに全部食いつくす。」

明久

「貴様ら! 僕には割り箸しか食べさせない気だな!？」

いや割り箸食う気かよお前!!？

明久

「無機物のビニール袋よりは食べ物に近いさ。」

雄二

「割り箸もやらん、俺達が素手でラーメン食うハメになる。ちゃんとお前の分も買ってある。」

ライ坊

「僕も買ってきたよ。」

リュウガ

「俺もだ、有り難く食えよ。」

雄二…ダイエットコーラ

ライ坊…コンニャクゼリー

リュウガ…ところてん

明久

「全部カロリーゼロじゃないか！！！」
（泣）」

雄二

「お前がメタボにならないよう俺達の気遣いだ。」

ライ坊

「そうだよ。それでしばらくはデブから回避できるんだから。」

明久

「僕の食生活のどこにそんな心配があるんだよ！？」

リュウガ

「糖分と脂肪ばっか摂ってるだろうが。」

そう言って俺はサラダ油と砂糖に指差す。

明久

「それしか摂ってないんだよ!!!・・・もう怒ったー!!!」(怒)

雄二

「なんだ？やる気か？」

明久

「ああ、いずれはいつか決着を付けなければと思っていた所だよ。」

リュウガ

「ほう、これだけの数を相手にして良く言う。」

ライ坊

「オッケー、やってやろうじゃん。」

それぞれペットボトルを片手に睨み合う4人。……そして、

———ピチョン！

台所の水道から水が一滴。それと同時に動き出す！！

シャカシャカシャカ！！！！

4人がペットボトルを振りまくる。

4バカ

「「「チェストーーーー！！！！！！（ブシャアアアア！！！！）」」」

「

そして一定の所で蓋を開け、同時に相手に向けて射出！！（明久V
S他3人）

明久・雄二

「ぐわああああ！！！！」

ライ坊

「目がー！！！！」

リュウガ

「目に染みるー！！！！！！！！」

当然、目に染みてのたうち回る俺達。あ、ヤベ！鼻まで入って来た
！！イタタタタタ！！

雄二

「やるじゃねえか明久！！！！」

明久

「雄二達こそ！！！！」

ライ坊

「うあゝゝゝ、ベトベトするゝゝ。」

さっきのジュース掛けでベトベトになった俺達。明久達は食べ物付まで付いて余計にエライ事になってる。

明久

「シャワー浴びなきゃだねゝ。雄二、先は行っているよ。」

雄二

「ここのシャワーは浴びたくねえ!!！」

さっきので痛い目見た所為か、入るのを拒否してどっか行こうとする。

明久

「じゃあどうするのさ?」

雄二

「ちゃんと温水の出る所に行く。」

リュウガ

「どこだ？」

雄二

「こっから近い所だ。ついでにプールもある。」

ライ坊

「ホント！？だったら僕も〜。」

結局、全員でそこへ行く事にした。

|||||

西村（先生）

「なるほどそれで勝手に忍び込み、シャワーを浴びたついでにパン
ツ一丁で泳いで、勢い余って他の奴らも呼び出して遊んだと言う訳
だな。」

ただいま俺達4人・・・いや、ヒマだったブレイドと内田・・・違った照山とカミナを誘って合計7人の俺は、ただいま鉄人（西村）の説教を受けていた。理由は鉄人の言った通り。

西村

「何か言い訳はあるか？」

7バカ

「「「「「こいつ（ら）が悪い（んです）（んだ）！！！！」」」」」

明久

「なにさ！元はと言えば雄二達がまともな差し入れもって来ないからだろ！？」

雄二

「いゝや、ガス代払わなかったお前が悪い！！」

ブレイド

「リュウガ！鉄人が来るなんて聞いてねえぞ！！」

照山

「そーだそーだ!!!」

リュウガ

「俺だって知らなかったんだよ!」

明久

「水が出るだけましじゃないか!!!」

雄二

「水すら出ない事があるのかおまえんちは!!!?」

西村

「・・・もういい、わかった。」

あ、やべ。鉄人からオーラが・・・

明久

「でしょ? 僕は悪くないでしょ?」

ライ坊

「バカな兄ちゃん、そっちのわかったじゃないと思うよ・・・（汗）」

うん、ライ坊正解。これは絶対・・・

西村

「お前らが底抜けのバカだという事が分かった！！！！罰として来週末、貴様ら全員でプール掃除をすように！！！！！！」

7 バカ

「「「「「「・・・ハイ。」「」「」「」」

俺達がバカだって事。

そして物語は、16時間目へとつづく。

番外2番「もう、あいつの家には行きたくねえ！byリユウガ」(後書き)

ハイ、プール0，5話でした。次回は地獄(?)のデート編。お楽しみに!!

番外3番「如月グランドパーク尾行ツアー!」その1(前書き)

プール騒動から数日後のお話です。

番外3番「如月グランドパーク尾行ツアー！」その1

<トウガ視点>

ある6月の早朝、自分は明久に呼び出された。

トウガ

「何だよこの朝早くに？」

明久

「ごめんごめん、実はトウガにバイトを手伝ってほしいんだ。」

トウガ

「バイト？悪いが駄目だ。今日あさひ達と遊びに行くんだ。」

明久

「え、そうなの？（P i P i P i P i）っとごめん、ちょっと電話に出るよ。」

そう言って明久はケータイを取り出し電話に出る。

明久

「非通知？誰だろ？……はいもしもし、どちら様ですか？……え？誰？何？！もしもし！？もしもーし！！！」

トウガ

「……一体なんの電話だった？」

明久

「……知らない誰かがいきなり、『オマエヲコロス』って。
（汗）」

トウガ

「あっそ、こっちあさひ達の約束あるからもう帰るわ。さよなら明久、……永遠にな。」

明久

「ちょっと！？そっちも物騒な事言わないでよ！？ていうか帰らないで僕を助けて！！」

トウガ

「嫌だよ。何で自分がお前の死亡フラグを背負わなきゃならないんだ？」

明久

「ちよ、今死亡って言ったよね！？僕死ぬ事確定！？」

トウガ

「確定。（笑）」

明久

「ちきしょー！ー！！これで死んでも死ななくてもお前を呪ってやる！ー！ー！！！！」（泣）」

そう言って明久は泣きながら走り去って行った。さて、帰って準備しなきゃな。・・・眠いけど。

|||||

それから数時間後、集合場所でメンバーが揃い（メンバー…自分、あさひ、クルス、キャロ、Cクラスのエリ坊・・・じゃなくてエリオ）、今日の遊び場、如月グランドパークへやってきた。

クルス

「トウガさん、本当にいいんですか？僕達の分の入場料出してくれて。」

ここ如月グランドパークの入場料は、高校生の小遣いで入れるか入れないかぐらいの値段。クルスの言うとおり、自分はその全員分の入場料を出した。

トウガ

「気にするな、うちの家系は金持ちだから。」

あさひ

「本音は？」

トウガ

「金持ちのコータ（中林コータロー）との賭け勝負で、勝ちまくった結果ゲットした金だからノンプロBLEM☆」

クルス・エリオ

「「あなた最低だ！！！」（汗）」

失敬だな、相手が無理やり誘ってくるから制裁した結果なのに。それにしても、この二人やけに息ぴったりだな。

キャロ

「あはは……あれ？」

自分達のやりとりに苦笑いしていたキャロが何かに気づいた。

キャロ

「あの、あれって……」

クルス・エリオ・トウガ・あさひ

「「「「？」」」」」

そう言ってキャロが指差した所に目を付けると、

雄二

「（ミシミシ）ちょ……翔子……やめ……」

翔子

「……恋人同士は、皆腕を組んでいる。」

Aクラス代表の霧島翔子さんが、Fクラス代表の坂本雄二の腕を関節を極めていた。

クルス

「Aクラスの霧島さん？ しかも坂本さんと二人で……」

キャロ

「もしかして、デートでしょうか？」

トウガ

「いや、雄二の人生を終わらせにココへ来たのかも。」

エリオ

「その考えはおかしいですか？（汗）」

あさひ

「いやその前に皆、腕の関節極められてる所に気づこうよ。」

そんなやり取りしてる中、雄二達の前に3人のスタッフが現れる。
その3人は、一人は中性的な顔つきの男子、一人は背の低いキャツ
プ帽子を被ったガキ、そして最後の一人は、今朝自分と会ったバカ。

秀吉

「いらっしやいませ！」

明久

「如月グランドパークへ・・・」

ライ

「ようこそー！ー！！」

そう、秀吉とライ坊と明久が顔をマスクで隠して雄二達の前に現れた。すると雄二は、ケータイを取り出しある人物に電話する。

P i P i P i P i P i

すると今度は明久のケータイから音が鳴り、明久はケータイを取り出し電話に出る。

雄二

『よう明久、テメエ随分と面白い事してるじゃねえか。』

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

暫しの沈黙。そして・・・

明久

「・・・・・・・・人違いです!!」(ダッ!!)

そう言って明久は秀吉達と一緒に逃げだす。もちろん雄二もそれを追いかけて行く。・・・・・・・・それにしても、

トウガ

「面白そうだな。・・・・・・・・よし、後を追いかけるとしよう。」

クルス

「ええ!?!」

エリオ

「トウガさん、それはどうかと――」

トウガ

「なーに、人の恋路は邪魔しないのが自分のモットーだから。とい

うかむしろ応援する方が好きだから大丈夫。」

エリオ

「いやそう言う意味じゃなくて——」

トウガ

「じゃあ行ってきました。」（ダッ!!）

エリオ

「ちょ・・・トウガさん!？」

エリオの呼びとめを無視して自分は走る。面白くなりそうな雄二のデートを観る為に。

トウガ

「にしし、どんな事になるかな?」（笑）

う
う
へ

番外3番「如月グランドパーク尾行ツアー!」その1（後書き）

その2へ続く!!

番外4番「如月グランドパーク尾行ツアー！」その2

<トウガ視点>

明久達と雄二・霧島さんペアの後をついていくと、みんな噴水の前で立ち止まる。どうやら仕掛け人（スタッフ）の明久達は追い詰められたようだ。

雄二

「ライはともかく、お前までどういうつもりだ秀吉!？」

雄二は秀吉に問い詰めるが、秀吉は顔色一つ変えずマスクと髪留めピンを外す。

秀吉

「なんの事でしょう？私は如月グランドパークのスタッフでございます。お客様の知人とは、縁もゆかりもございません。」

雄二

「あくまでもしらを切るというのなら・・・」

そう言って雄二はまたケータイを取り出し電話する。

(P i r u r u r u ! !)

すると今度は秀吉の懐からケータイの着信音が鳴る。

秀吉

「おおっと！手が滑りました！！」

そう言いながら、秀吉は自分のケータイを急いで取り出し噴水の中へ・・・って、ちょっと待て。さすがにそれはやりすぎじゃ？

雄二

「そこまでするか？（汗）」

さすがの雄二も、呆気とられている。

秀吉

「お客様、招待チケットはお持ちですか？」

翔子

「・・・・・・・・はい。」

そういつて霧島さんが、一枚のチケットを取り出す。あれ？あのチケットって・・・

秀吉

「おお、これは特別企画のプレミアムチケット。」

・・・あー、思い出した。確かオリエンテーリング大会の景品の一つだったな。そんな事を思い出してる中、秀吉がなんかゴツイ無線機を取り出す。

秀吉

「アルファよりブラボー、ターゲットを確認。コードの生でウエディングシフトをしくぞ。確実に仕留めるのじゃ！」

雄二

「おいコラ待て、何だその不穏当な通信は！？」

秀吉

「お気になさらず。こちらの話ですから。」

雄二

「明らかに俺達の事だろ!？」

秀吉

「それでは、特別サービスの記念撮影をいたしましょう。」

雄二のツツコミも気にせず、次に進める秀吉。

パチン!

秀吉が指パチンを鳴らすと、どこからともなくカメラを持った黒子の覆面を被った男子スタッフが現れた。

???

「……………お待ちせ。」

雄二

「・・・・・・・・翔子！悪い！！」

さすがに我慢の限界がきた雄二は、霧島さんのスカートをめくった。

???

「・・・・・・・・っ！！！」（ズザアアアア！！！！）

それと同時に黒子のスタッフが、スカートの中を撮ろうと撮影体制に入る。・・・・・・・・が、

雄二

「染み付いた習性は隠せれない様だな、ムツツリーニ。」

ムツツリーニ

「・・・・・・・・!!」

その行動で正体がばれてしまう黒子のスタッフことムツツリーニ。
そして雄二は霧島さんに詰め寄られる。

翔子

「・・・・・・・・雄二、えっち。」

雄二

「も、もうしないから許せ。」

そう言いながら顔を背ける雄二。

翔子

「・・・・・・・・うん。続きはベッドで。」

雄二

「もうしねえって言ってんだろ!? 俺はお前の下着になんか微塵も

|||||

数分後、さっきの写真を特殊加工（ハートの中に写真が写っていて、その上に『私達、結婚します』という文字が入っている。）された物を雄二・霧島さんペアに渡す。

雄二

「何だこれは？」

秀吉

「サービスの特殊加工でございます。」

ライ

「いい出来でしょう？ お客様。」

明久

「この写真は、記念としてパークの写真館に飾られます。」

雄二

「貴様ら正気か！？」

確かに正気では無いな。…………バカだし。

翔子

「…………雄二、照れてる？」

雄二

「この写真に照れる要素は一つもねえ。」

少なくとも、あるのはカオス要素ぐらいしかない。

???

「あゝ、見て見てリュウタ。あたしらも写真撮ってもらおうよ。」

???

「おう、そうだなリコ。おいそこの兄ちゃん、俺らも写ってやんよ。」

そこにヤンキーなカップルがやって来る。おや？トラブル発生しそうだな。

秀吉

「誠に申し訳ありません、こちらはプレミアムチケットの特別企画でございます・・・」

秀吉が冷静に答えるが、相手は納得いかず、

ヤンキー男

「ああん！？いいじゃねえか一枚くらい、俺らお客様だぞゴラァ。」

秀吉にメンチを切るヤンキー男。ムカつくヤローだな。

ヤンキー男

「あんなつまんねえガキより俺ら撮った方が宣伝的によくね？ ああ
ん？」

そう言いながら雄二達を指差しそう言う。（心の中で）言っておく
がヤンキー、お前より雄二達の方が一番いいからな。

ヤンキー女

「そうそう。そんな高坊より、リュウタの方が倍カッコ良くない
？」

・・・・こいつらホント最低だな。

翔子

「・・・・・・」

雄二をバカにしたからか、霧島さんが二人に詰め寄る。

雄二

「待て、どこ行くんのだ？」

が、雄二が止めに掛かる。

翔子

「……あの二人、雄二の事悪く言った。」

雄二

「そんな事気にすんな。」

翔子

「……雄二がそう言うなら。」

雄二の説得(?)によって諦める霧島さん。

ヤンキー男

「いいから俺らも同じの撮れや!!」

そして未だに秀吉に詰め寄るヤンキー男。……そろそろシメるか。だがどうやって明久に自分を気づかせるか……お?自分の足元にスパーボールが。丁度いい、これを明久に投げ当てる。

明久

「?・・・!」

スーパーボールは見事明久に当たり、明久は飛んできた方に目をやると、自分がいる事に気づく。よし!

トウガ

『明久、自分がヤンキーカップルをシメる。だからちよつとムツツリーニのカメラを貸してくれ。』

明久

『うん、分かった。』

これが特技、『目で会話』。出来るのはマジで心が一つになれたダチでないとできない。会話を終了し、明久はムツツリーニにカメラを借りて、そのまま自分に気づかないよう投げ渡す。よし、キャッチ成功。作戦開始だ!!

トウガ

「そこのお兄さん方、よかったら自分が写真を撮ってあげましょうか？」

ヤンキー男

「ああん？何だテメーは！？」

自分に気づいたヤンキーは今度は自分にメンチを切る。・・・にしても髪型リーゼントウザいな。

トウガ

「なに、通りすがりのカメラマンですよ。覚えなくてよろしいです。」

ヤンキー男

「んで、オメーがこいつらの代わりに写真撮ってくれんのか？」

トウガ

「ええ、キレイさっぱり取ってあげますよ。」

ヤンキー男

「・・・・・・は？」

ブチチチイ！！！！

トウガ

「お前の髪の毛をな。」

ヤンキー男

「ぎゃああああああああああああああああ！！！！？」

自分が何をしたかというと、1…リゼントを思いっきり掴む。2…
思いっきり髪を引きちぎる。以上。おかげで相手の頭はカッパのよ
うになった。

ヤンキー男

「ゴラテメー、なんて事しやがる！！？（怒）」

ヤンキーがキレているが、そんな事気にせず髪の毛を束にしてひも
で巻き、近くにあったペンキ（黒）を付けて紙に落書きする。

トウガ

「書きづらいなコレ。」（グリグリ！）

ヤンキー男

「ああ、何してんだテメー！！」

トウガ

「ああ、散髪代は要らないのであしからずカッパさん。」

ヤンキー男

「そう言う事を言ってるじゃねえよ!! つかカッパにしたのはテメーのせいだろ!? 締めるぞコラァ!!」 (怒)

トウガ

「やれるもんならやってみな。」 (ピュー!)

そう言って一目散に逃げる自分。

ヤンキー男

「待てゴラァ!!」 (怒)

もちろんヤンキーカップルも追いかける。

トウガ

「さて、後はトイレかどこかでシメるとしよう。」

つづく

番外5番「如月グランドパーク尾行ツアー！」その3

<トウガ視点>

あの後ヤンキーカップル（男の方）を、近くにあったトイレの中でシメあげて、すぐさまヤンキーカップルを退場させた。その後離れた明久達と合流する為、パークの中を見て回りながら捜索中。

トウガ

「一体どこかな〜？」

そう言いながら探しまわっていると・・・

トウガ

「ん？」

ある物を見つける。

トウガ

「何だこれ？」

住所 聖王学園Fクラス

氏名 ?

|||||

トウガ

「……何があった？」

しかもよく見ると、その誓約書の裏にまだ何かあるらしく、誓約書を捲るとそこには婚姻届が貼っていた。

トウガ

「ホントに何があった？」

|||||

それからまた数時間後、中々見つからず、ついに自分の腹から腹の

音が鳴り、一旦探すのをやめて近くのレストランで昼飯にする事にした。

あさひ

「あれ？ トウガ？」

クルス

「トウガさん？ 随分長い尾行でしたね・・・（汗）」

エリオ

「どこまで行ってたんですか？（汗）」

キャロ

「坂本さんと霧島さんどうでした？」

入るとそこで、自分達のメンバーと合流し、とりあえず、一緒に食事を楽しみながら尾行してた間の事を説明した。

あさひ

「なるほど、そんな事があったんだ。それにしても酷いねそのヤンキーカップル。」

キャロ

「全くです。その人たちを悪く言う方が酷いと言うのに・・・」

自分の説明を聞いて、話しに出てきたヤンキーカップルに腹を立てる女子二人。

クルス

「トウガさん、確かにそのカップルが悪いと思いますが・・・」

エリオ

「何も髪の毛を引き千切らなくても・・・しかもそれで筆代わりに使うって。(汗)」

一方男子二人は、自分がヤンキー(男)にやった事にちよつと引いている。

トウガ

「何だよ、本来なら全部引き千切って首をねじ曲げてシメた後、ハゲになった頭に『まそっぷ』って書くのも良かったけど、今回はリーゼント部分だけ千切って首をねじ曲げてシメただけだ、これだけで良いと思え。」

クルス・エリオ

「「半分以下しか減って無いですよ!?!?」」

自分達がそんなやりとりをしている最中に、
.....それは起こった。

フツ！（電灯の電気が消える音）

トウガ

「ん？」

あさひ

「何？ 停電？」

急に電灯が消えたので顔には出てないが、少し驚く。それから数秒

後、レストランの奥にあるステージにスポットが当たる。そしてそのステージに立っていたのは……

秀吉

「皆様。本日は、スペシャルランチショーにお越しいただき、誠にありがとうございます。」

袴^{はかま}を羽織った秀吉だった。なぜに袴？ っていうかココこいつがいるって事は……

美波

「実は、なんとこの開場には、結婚を前提にお付き合いしている高校生のカップルがいらっしやいます！」

雄二

『なにい!!!?』

続いて出てきたウェイトレス姿の島田美波が説明すると、どっから雄二の声が聞こえた。やっぱり居たのか雄二。

秀吉

「ここで、そんなお二人を応援する催しを開催いたします。」

ライ

「題して!『如月グランドパークウエディング体験プレゼントクイズ』〜!〜!」

明久・開場の客

『いえ〜〜〜い!!!〜!』

うお?! 何だ!?! 明久はともかく、客が妙にテンションが高い・・・
・・・って、あれ?

1 番 テーブル .. リュウガ ・ ブレイド ・ イヴ

2 番 テーブル .. セツナ ・ 未央 ・ 梶^{クチナシ}

かった。

雄二

「しまった！退路を断たれた！！」

雄二が扉が閉まる事に気づくが時すでに遅し。雄二の人生の終わりが幕を開ける。

つづく

番外5番「如月グランドパーク尾行ツアー!」その3（後書き）

次回辺りでデート編終了です。お楽しみに!!

番外6番「如月グランドパーク尾行ツアー！」その4（前書き）

今回で尾行ツアー編、終了です！！

番外6番「如月グランドパーク尾行ツアー！」その4

<トウガ視点>

パークのマスコットキャラ『ノイン』（の着ぐるみを被った明久）
「それでは、クイズを始めます！！」

明久ことノインがノリノリで司会を始める。

あの後雄二は、パークのマスコットキャラ『フィー』（の着ぐるみを被った姫路さん）に「前方のステージへどうぞ。」と招かれたので拒否したが・・・

翔子

『・・・・・・・・ウェディング体験。・・・・・・・・クイズ頑張る。』

隣で燃えていた霧島さんによって強制参加されてしまった。

クルス

「始まっちゃいましたね・・・（汗）」

エリオ

「坂本さん、大丈夫でしょうか？（汗）」

あさひ

「まああの坂本君の事だし、敢えてクイズを間違えると思うから大丈夫」「それは難しいと思う。」夫？」

あさひの言葉に反応し、そう言いだす自分。

キャロ

「どういう事ですかトウガさん？」

トウガ

「雄二を嵌めようとする仕掛け人達の事だ。雄二が間違える事が出来ない問題を出してくるに違いない。」

クルス

「いや、さすがにそれは「では、第一問！！」」

クルスが言いきる前に、ノインが問題を出題する。

ノイン

「坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしうか？」

雄二

「・・・・・・」

その一言で、雄二が啞然とする。

トウガ

「ほらね？」

クルス・エリオ・あさひ・キャロ
『・・・・・・・・』

そしてこっちの皆も啞然とする。

翔子

「（ピンポン）・・・・・・・・毎日が記念日。」

ノイン

「正解です！！そして今日は記念日。おめでとう！！」

その間にボタンを押して答えた霧島さん。しかもそれが正解とは・
・

ちなみにその答えで、雄二は恥ずかしさで悶えていた。

ノイン

「では第二問!! お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？」

ピンポーン!!

次に問題を答えるため、ボタンを押したのは・・・

雄二

「サバの味噌煮!!!」

雄二だった。そして答えはなぜか食べ物。でも、雄二が間違えたからここでクイズは終了!!!!

・・・と思いきや、

「では第三問!!」

雄二の抗議を無視して次へ進めるノイン。

ノイン

「お二人の出会いはどこでしょうか？」

雄二

「貰ったー!!」

また答えを間違えようとボタンを押しにかかる雄二。

ヒュン！！（何かが風を斬った音）

ブスリ！！！！（何かが刺さった音）

雄二

「あゝーーーーーっ！！！！！」

と思った瞬間、謎の音がした3秒後、雄二が目元を押さえて悶えていた。

翔子

「（ピンポン）・・・・小学校。」

ノイン

「正解です!!!」

その間にまた霧島さんが答える。

クルス

「えーっと、今の何があったんでしょう？（汗）」

トウガ

「さあな……でも、雄二が失明しかけてるのは分かる。」

エリオ

「そっちですか？」

ノイン

「では第四問!!!」

そんな会話をする中、次の問題に――

ピンポン！！

行く前に雄二がボタンを押した。どうやら無視を決め込んだらしい。

しかし、雄二の詰めは甘かった。なぜなら……

雄二

「わかりま——」

ノイン

「正解です☆」

相手も無視を決め込みやがった。

これで四問正解。そしてついに最終問題へ——

???

「ちょっと、おかしくなーい？」

行こうとする前に乱入者が出現。ていうか今の声……

ヤンキー女

「あたしらも結婚する予定なのに、何でそいつらだけ特別扱いな訳？」

ヤンキー男 カッパ

「おう、俺らにもやらせろや。」

あ、さっきしばいたハズのバカッパル（バカなカッパのカップルの略）。って今の男の方は帽子被ってるからカッパじゃないか。

じゃなくて、しばいたつーのに懲りないなあいつら。

ノイン

「カッp・・・お客様、まだイベントの最中で・・・」

ヤンキー男

「うっせえんだよたらこ!! 俺も、オ・キャ・ク・サ・マ!! だぞ
コラァ!!!」

ノインがヤンキー男を止めようとするが効果なし。というかヤンキー男、客なら大人しくしてろ。

まあ、これじゃあステージの邪魔になるのは確かだからもう一丁しばくとしよう。人の恋路をなんとやら。

|||||

んで、こっそりとステージの裏へ来たものの・・・

トウガ

「どれが連絡用の放送機材だ？」

そう迷っていると、誰かが肩を叩いてきた。

ムツツリーニ（康太）

「・・・・・・・・放送機材ならそれ。」

叩いてきたのはムツツリーニ。そして自分が探していた物に指をさす。

トウガ

「おう、ありがとな。」

さてと、それじゃあやるか。

ピンポンパンポーン！！

トウガ

「えーリユータさんリコさん、如月グランドパーク鳳凰の間までお越し下さい。繰り返します、リユータさんリコさん、如月グランドパーク鳳凰の間までお越し下さい。」

よし、バカッパルの誘導はOKだな。次はケータイを取り出して・・・

トウガ

「ブレイド先輩？さっきのカップルの男、ちっちゃくて可愛い女の子をいじめてました。」

さあ、後は・・・

|||||

ヤンキー男

「ああん？誰もいねーじゃねえか。」

ヤンキー女

「しかも真っ暗。ちよつとどーゆー事？」

トウガのデマ放送により、素直にやってきたバカッパル。しかし女の言うとおり、部屋が真っ暗であった。・・・・すると、

バツ！！

部屋の照明が一気に付き始める。

トウガ

「お二人様、ようこそおいで下さいました。」

ヤンキー男

「あ！テメーさっきの！！」

ヤンキー男が自分に気づくがもう遅い。

トウガ

「それではただいまより・・・」

トウガ

「うん、いいもの見れたわー。」

帰り道、自分ひとりで帰りながらそう呟く。

今の自分、間違いなくいい顔してるかもな。
(悪い意味で)

トウガ

「雄二と霧島さんの方、上手くいったかな。」

そう言いながら空を見上げる。

トウガ

「・・・・・・・・。」

ふと、ある事を思い出した。

あさひと会うずっと前から……

仲が良かった女の子……

親の都合で海外に引っ越して……

……

トウガ

「……さて、今日の晩飯は外食にするかな。」

そう言って自分の足は、晩飯目指して歩いていく。

ぐ
〜
〜
〜
〜
〜
・
・
・

腹を鳴らしながら。

番外6番「如月グランドパーク尾行ツアー!」その4（後書き）

次回・・・新章『夏休み編』スタート!!

お楽しみに!!!

夏の定番その1「海水浴!」(出発) (前書き)

今回から新章スタートです。

夏の定番その1「海水浴! (出発)」

<トウガ視点>

D対Fの、試召戦争が終わった次の日、自分の長兄『梶原ヤイバ』と、長女『梶原サクラ』が帰って来たその日の夜……

ヤイバ

「トウガ、何かいい残す事は？」

自分はなわに縛られながら、兄者の異端者への制裁を受けている最中だった。

(どうしてこうなっているのかは、前作の『24時間目』を参照。)

サクラ

「まあまあ、兄さん。とう君もお年頃ですし——」

ヤイバ

「10秒やる。それまでに懺悔なり色々言いな。」

姉さんが兄者を宥めようとするが、兄者は聞く耳無しの状態。そして兄者は（ある人から貰った）鞭、ロウソクを構え、10秒待つ。

さて、この状況で自分は冷静でいている。なぜかって？この状態の兄者を急変させる策を自分は持っているからだ。

トウガ

「じゃあ、兄者も海行かない？水着の姉さんがいっぱいだよ。」

ヤイバ

「OK!行こうぜ兄弟、大海原へ!!!」

兄者は面白い事と女性の事には弱い。だから一緒に行かないか誘えばいいだけ。

トウガ

「・・・・・・計画通りWWW（ニヤリ）」

サクラ

「とう君・・・・顔が怖いです・・・・」

キコエマセンナ~~~~。

兄者達が入ったおかげか、日帰りから一泊二日の海水浴になった。

|||||

A対Fの試召戦争も終わり数日後、夏休みに入って海に行く当日、メンバー（自分、あさひ、ライ坊、リュウガ先輩、クルス、シモン、カミナのアニキ、ヨーコさん）は集合場所で兄者の車と姉さんの車を待っていた。ちなみに、ヨーコさんは自前のバイクで行くらしい。キャロちゃん（十エリ坊ことエリオ）がいないのは、聖王学園の卒業生でなのはさんの親友、フェイトさんと、Aクラスのルーテシアちゃんの家族と夏を過ごすとの事。

ライ

「それにしても、今日は晴れてよかったね。」

ライ坊ことライが、空を見上げて言う。それを聞いた自分も空を見上げる。

すると空は雲一つもない真っ青な青空。その空にあるのはただ一つ、大きな太陽だけだ。

リュウガ

「・・・・暑い。（汗）」

リュウガ先輩も、太陽を見ながらそう呟く。でも暑いのは仕方がない、夏だし。

カミナ

「おうおうおう！^{オトコ}漢として情けねえぞリュウガ！真夏の太陽この手で掴みゃあ、凄く暑いが我慢する！！意地が支えの漢道！！カミナ様は、こんな暑さに負けやしねえぜ！！！」

そしてその横で、カミナのアニキが暑く・・・・・・じゃなく熱く語る。うん、暑苦しい。

クルス

「あの人といて疲れない？シモン君。」

シモン

「いや、もう慣れたよクルス。」

カミナの行動を見て、クルスはそんな人の傍にいるシモンを心配するが、シモンは平気でそう答える。

シモン

「小さい頃から、アニキのおかげで色々な事に巻き込まれたから。」

トウガ

「具体的には？」

シモン

「・・・アニキとキャッチボールしてたら、アニキのボールがカミナリおじさんの窓に直撃して、代わりに俺が謝ったり。・・・アニキが女子風呂を覗きに俺を無理やり連れてって、女子に見つかった時俺を囚にして先に逃げたり。・・・アニキの家出に巻き込まれ、気が付いた時にはいつの間にかマグロ漁船に乗っていた。・・・etc. etc. (泣)」

クルス

「・・・・・・・・」

あさひ

「・・・あはは。(汗)」

シモンの過去に同情した、暑く悲しい夏・・・・。

トウガ

「あさひ、姉さんの車に乗っという。他の皆はジャンケンの準備。」

クルス

「へ？どうしてですか？」

自分の言葉に疑問を抱くクルス。

トウガ

「理由は三つ。まず一つは、兄者の助手席に女子を乗せると、その子の方に目線が行って事故の可能性がある。」

シモン

「・・・・・・そうなんだ。（汗）」

トウガ

「二つ目。どっちの車も4人乗りだから、一人だけ兄者の車の広い方の荷物置きに座る事になる為。」

リュウガ

「マジで？」

ライ

「別に僕は荷物置きでもいいけど？」

トウガ

「やれやれ。ライ坊、分かってないからそんな事が言えるんだ。」

ライ

「?どゆこと？」

トウガ

「三つ目。兄者の運転は、『これ死ぬ!!』って思う程の運転をする。」

リュウガ

「最初は――」

全員

『グー!!!!!!』

全員すぐさまジャンケンを開始した。……己が生き残る為に。

|||||

それからまた数時間、長い移動も終えて目的地の旅館へと到着。そして……

シモン

「……」
（怯）

リュウガ

「……」
（放心状態）

ライ

「……」
（泣）

カミナ

「・・・・・・・・（返事が無い。ただの屍のようだ。）」

あさひ

「・・・・・・・・大丈夫？」

心配になって4人に声を掛けるあさひ。そのあさひの声に、シモンが答える。

シモン

「・・・・・・・・俺もうジェットコースター恐くない。（怯）」

到着してから、4人はもうすでに疲れていた。

つづく

夏の定番その1「海水浴!」(出発) (後書き)

始まりました、新章『夏休み編』。

次回は色んなキャラと接触と、夏の定番開始。

お楽しみに。

夏の定番その2「海水浴!」(西瓜) (前書き)

久しぶりの番外小説の投稿です。

夏らしく夏の小説を書こうと思ってから、4か月の時が流れて今はもう冬・・・なにやってたんだろう。(汗)

夏の定番その2「海水浴!（西瓜）」

《トウガ視点》

旅館に着替えなどの荷物を置き、そこから数分歩いて海水浴場に到着。

ヤイバ

「よーし! 早速遊ぶとするか!」

ライ・リュウガ・カミナ

「「おーーーーー!!!」」

そしてすぐさま兄者と回復した三人は、あらかじめ着けていた水着姿で海へと向かった。

サクラ

「私達も行きましょうか。」

あさひ・クルス

「「はい。」」

そこから姉さん達も後を追うように海へと向かった。ちなみに自分は……

トウガ

「よつと。」（バサッ）

ヨーコ

「大丈夫？ シモン。」

シモン

「……………うう。」（怯）

パラソルを立てたりブルーシートを広げたりと、兄者の運転で疲れたシモンを休める場所を用意していた。

昼寝をしていた。

シモン

「トウガ・・・少しは皆と遊ぼうよ。」

やっと回復したシモンが、寝ているトウガに呟く。

トウガ

「・・・・・・・・いや、ちょっと訳ありだね。」

するとトウガが起き・・・・・・・・いや、正確には寝ている振りをやめてシモンにそう答える。

シモン

「訳あり？」

トウガ

「人間、簡単に浮けるようにできちゃいない。」

シモン

「ああ・・・カナヅチなんだ。」

トウガ

「そゆこと。・・・さて、腹が減ったからちよつと海の家で何か買ってくる。」

シモン

「うん、いってらっしゃい。」

自分の財布を手にして海の家に向かうトウガ。

トウガ

「焼そば、お好み焼き、カレー、かき氷もいいなあ・・・ん？」

食べ物的事を考えながら向かっている途中、会場らしき所でイベントが始まっていたのに気づき、一旦足を止めてそっちの方に見て見る。

クルス

「ヤイバさーん、右ですー。」

ライ

「違うよ、ひだりー。」

カミナ

「前だ、前!！」

トウガが海の家での買い物を終えて戻ってくると、皆でスイカ割りをやっていた。

サクラ

「兄さん、そこから左43度、前方10メートルです。」

リュウガ

「せんぱーい、実は逆方向。」

サクラ以外、ほとんどが遊び半分で言っている為ヤイバはだれの声を当てにしていいいか分からなかった。

ヤイバ

「おい、トウガ。スイカはどこにある？」

トウガ

「上。」

ヤイバ

「それは絶対ないだろ？」

||||||| (トウガ視点) |||||

そしついに自分の番に回り、スイカがどこか探る。

トウガ

「.....」

集中、集中、心を無にしてスイカを.....

リュウガ

『おーい、買って来たぞ。』

あさひ

『あ、ありがとうございます。』

ヤイバ

『全く。後輩とはいえ何でこいつと一緒に買い物なんだ。』

リュウガ

『先輩がいつまでも独身だからでしょ？』

ヤイバ

『んだと?!』

心を無にしてスイカを・・・

ヤイバ

『そういうお前だって、今でも女子に告白しては振られての繰り返しじゃねえか!』

リュウガ

『違うい!断られたんじゃないくタイミングが悪かったただけだ!』

スイカを――――

ヤイバ

『俺だってタイミングが悪いだけだ!』

リュウガ

『ハッ!どうだかねえ!!』

……狙いを見つけ、そのまま獲物にそっと近づく。

ヤイバ

『言ったな!?!上等だツラ貸せや!!! (怒)』

リュウガ

『今は先輩後輩関係ねえ！お前は俺がぶちのめす！！！！』
（怒）

そして射程範囲に入り、

リュウガ・ヤイバ

『くたばれ！！！！！！！！！！』
（怒）

思いっきりフルスイング。

リ
ユ
ウ
ガ・ヤ
イ
バ
『『ご
が
っ
!!?
』
』

兄者とリュウガ先輩に目掛けて。

トウガ

「あ、ごめん兄者にリュウガ先輩。スイカと間違えちゃった。」

クルス

「あの、さすがにやりすぎですよ・・・（汗）」

知るか。もとはと言えばこの二人の喧嘩のせいだかな。

こうしてスイカ割りとは、二つの固いスイカを割って幕を閉じた。

夏の定番その3「海水浴! (ナンパ)」前編(前書き)

海水浴じゃ見かけるようで見かけない事。

逆ナンなんてもっと見かけない事。

夏の定番その3「海水浴! (ナンパ)」前編

《リュウガ視点》

リュウガ

「いってゝ、酷い目にあった・・・」

ヤイバ

「全く、トウガのやろう・・・」

スイカ割りの後、決められた時間内の自由行動で俺とヤイバ先輩は、未だに痛む頭をさすりながら歩いていた。

141

ヤイバ

「それにしても、随分変わったなトウガは。」

リュウガ

「・・・そう言えばそうっすね。」

中学時代の頃のトウガはもっと真面目というか、おとなしい奴だっ

た。それがああったのなら聖王学園のバカ達に毒されたとも言えるだろう。

「・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・！」

リュウガ

「ん？」

先輩とそんな会話をしている途中、聞き覚えのある声が聞こえた。
この声はもしかや・・・・・・・・

雄二

「なーにが！俺達はモテないだ！！」

明久

「全くだよ！」

コータ

「理不尽すぎるぜ！」

我がFクラスの問題児2人とAクラスの変態、坂本雄二と吉井明久、中林コータローであった。なにやら少し機嫌が悪いみたいだ。

リュウガ

「おーい、お前らどうした？」

明久

「あれ？リュウガ先輩？……と誰？」

ヤイバ

「ああ、初対面だったな。俺は梶原トウガの兄、梶原ヤイバだ。」

コータ

「ああ！そっちのリユウガ先輩からよく聞かされましたよ。元FF
F団会長で、未だに彼女ができてないとか。」

ヤイバ

「おいコラ、リユウガ。（怒）」

リユウガ

「それで、なんか今日は不機嫌そうだが何かあったか？」

怒っている先輩をスルーして明久に尋ねる。

明久

「実はですね——」

明久の説明からすると、ナンパされた女性陣に理不尽に怒られた上

に鈍くて恋愛ごとに縁が無く、女心が分かってないからモテない。
だからナンパなんてできないと言われたらしい。

リュウガ

「そりゃ確かに酷いな。」

コータ

「でしょ!?!いくらなんでも言い過ぎだあいつら!?!」

明久

「全く、僕だって少し本気だせばナンパくらい——」

リュウガ

「?どうした明——」

コータ

「?リュウガ先輩も一体——」

3人仲良くある光景を目にして……

3
バカ

「「ぐぼあ!!」」

3人仲良く吐血した。

雄二

「ど、どうした!? 明久に中林!!」

ヤイバ

「リュウガもどうした!? 毒か!? トラップか!?!」

俺達の突然の吐血に驚きつつも、先輩と雄二が駆け寄ってくる。だが、今はそれどころじゃない……!!

明久

「し、信じがたい光景が……」

雄二

「一体何を見たんだ!？」

コータ

「・・・逆・・・れ・・・。ムツ・・・の・・・うが・・・。」

ヤイバ

「あ? 何だって？」

コータ

「ムツツリーニのやろうが、・・・逆ナンされてる・・・。
!!」

ヤイバ

「ムツツリーニ？」

リュウガ

「Fクラスのクラスメイト・・・。本名、土屋康太・・・。」

ヤイバ

「ああ、トウガが言ってたムツツリスケベの・・・って待て待て。Fクラスのヤツが逆ナンされる訳——」

雄二

「全くだ。寝言は寝て言えと常々——」

そう言いながら二人も俺達が見ていた方向に目をやると・・・

少女A

『うわー！キミ写真撮るの天才じゃない？』

ムッツリーニ（土屋康太）

『・・・・・・これ位、一般技能。』

少女B

『またまた、照れちゃって可愛い。』

雄二・ヤイバ

「「がはあ!?!」」

二人仲良く吐血した。

雄二

「ありえねえ……! どうしてムツツリーニが……!」

ヤイバ

「信じられねえ……。いや、信じたくねえ……。!」

明久

「……ねえ、みんな。」

リュウガ

「何だ明久……。」

明久

「もしかしてだけどさ・・・このメンバーでモテないの、僕達だけなんじゃ？」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

暫しの沈黙・
・
・
・
・
・

雄二

「バカな事を言うな!! そんな事があってたまるか!!」

コータ

「全くだ! 寝言は寝て言えって何度言えば分かる!」

明久

「そ、そうだよね!? そんな訳ないよね!? ちょっと試してみただけさ!!」

リュウガ

「それにムツツリーニはパツと見て、おとなしくて人畜無害に見えるからな!!」

ヤイバ

「俺等とはタイプが違うだけって事だな!!」

雄二

「だから俺達がモテないと判断するのは早計だ!!」

明久

「そうだよね!?!何がナンパなんてできる訳ないだ!目にもの見せてやるさ!!」

コータ

「その意気だ明久!!俺達の本気を見せてやろうじゃないか!!」

明久

「おう!!」

ヤイバ

「俺等もやるぜ!!これを機に彼女をゲットだ!!」

リュウガ

「おうとも先輩!今年の夏はいただきだ――!!」

こうして俺達4人のナンパが始まった。これで『彼女いない歴〓年齢からの卒業』が達成できるぜ!!!

しかし、後になって思い返すと――

この時の俺達は・・・本当にどうかしてたとは思えない。

つづく

夏の定番その3「海水浴!」(ナンパ) 前編(後書き)

中編へつづく!

夏の定番その3「海水浴! (ナンパ)」中編(前書き)

今年最後の投稿です。皆さんよいお年を!

追伸..なのはGOD買いました。

夏の定番その3「海水浴! (ナンパ)」中編

《コータ視点》

明久

「――で、始めてみたものの・・・雄二達はナンパした事ある？」

雄二

「一度もないな。」

コータ

「俺もない・・・。」

明久

「実は僕も・・・。」

あの後、大勢の男連れはトラブルの元になるので二組に別れてナンパをする事にしたのだが・・・いきなり前途多難である。

雄二

「だがそう心配するなお前ら。こういうのは成功者の真似をすればいいだけだ。」

明久

「成功者？」

コータ

「ムッツリーニの逆ナンの事だな？」

明久

「ああ。確かにあれは成功例だね。」

向こうから声を掛けられる、なんて事は成功中の大成功だ。俺等とはタイプが違うから（↑ココ重要）あそこまでいかずとも、上手くいけば声を掛けられるかもしれない。

明久

「つまり、写真を撮ろうとしてる人を狙うってわけだね？」

雄二

「そうだ。まず一人目が、『よかったら自分が撮りましょうか？』と言ってきつかけを掴む。」

明久

「ふむふむ。」

雄二

「そして二人目が、話題をふくらませて会話を転がせば、後はほとんど拍子だ。」

おお。なるほ——いや、ちょっと待て。

コータ

「その二人目はあまりにもハンデが高いんじゃない？」

明久

「え？どゆこと？」

コータ

「最初の奴は会話の切っ掛けという問題をクリアしていて、二人目は話題探しと言う差が付いたスタートになっちまう。」

明久

「あ。」

明久も俺の説明で気づいたようだ。

雄二

「っち、さすがAクラス。頭の回転は早いじゃ——」

『じゃあ撮るよー。はい、笑ってーって、あれ？』

『どうしたの？』

『ごめん。メモリーが一杯だった。ちょっと待って。』

『もー、早くね。』

雄二・明久・コータ

「「「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」」」

声が聞こえた瞬間、そこに向かって全力ダッシュ!!俺の足、今だけチーターのように早くなれ!!!

雄二

「おいお前ら!何だその全力ダッシュは!?!」

明久

「雄二こそ!その爆走はなに!?!」

コータ

「まあ落ち着けお前ら!ココは俺に任せてゆっくり後を追ってこい!!!」

明久

「コータこそ！僕が切っ掛け作って置くからさ！！」

雄二

「お前なんかに信用できるか！ココは俺に任せとけ！！」

コータ

「何言ってるんだ！俺が言いだしっぺだから俺に——」

明久

「いゝや！ココは僕が！！」

雄二

「俺だ！！」

コータ

「俺だっの！！！」

明久

「でえええい！そうはさせるか！！」

三人仲良く小競り合いをしながら全力で走る。砂地で走りにくい
条件は五分五分！とにかく全力を費やして走りきる！！

少女A

『おまたせー。撮るよー。』

少女B

『はーい!』

少女C

『今度はちゃんと撮ってよー。』

雄二・明久・コータ

「「うおおおおお!!」」

間に合った! まだ写真は撮ってねえ!! 後は明久達より先に撮ってやるだけだ!!

明久

「はあはあ．．．。お姉さん．．．はあはあ．．．キレイ、ですね．．．。」

雄二

「はあはあ．．．。良かったら．．．はあはあ．．．綺麗な写真を、はあはあ．．．撮らせて．．．はあはあ．．．下さい．．．。」

コータ

「いえいえ．．．はあはあ．．．俺が撮って．．．はあはあ、あげますよ．．．はあはあ。」

少女達

「「「．．．．．。」」」

$$\text{Pi} \cdot \text{Pi} \cdot \text{Pi} \cdot \text{Pi} \cdot (\uparrow 1 \cdot 1 \cdot 0)$$

警察を呼ばれた瞬間、俺達は再び砂浜を駈け出した。

リユウガ視点

全く、バカだなあいつら。あんなに息荒してちゃあ変態扱いだぞ。

そんな事を頭の中で呟きながら、俺とヤイバ先輩でナンパを別の作戦で開始していた。その名も――

『相手の容姿をほめる』作戦!——え? ストレートすぎる作戦名だって? この際ネーミングはどうでもいいんだよ!!

ヤイバ

「なにブツブツ言ってるんだ?」

リュウガ

「あ、なんでもないッス。」

ヤイバ

「まあいいが・・・とにかく、問題は声を掛けるきつかけだな。」

そう、さっきのバカ三人はカメラと言うきつかけがあったからの作戦だった。(失敗したが) こっちは切っ掛けそのものが無いという問題を抱えていた。

ヤイバ

「ん、好機を待つしかないか——ん?」

リュウガ

「あ。」

考え込んでると、丁度タイミング良く目の前を横切ったお姉さんのタオルが落ちた。これぞ天恵！！！！

リュウガ

「あのー、お姉さん？タオル落としましたよ。」

即座に拾って声を掛ける。後は相手の容姿を褒めて会話を？げるだけだ！！

お姉さん

「あら。拾ってくれてありがとう。」

リュウガ

「あ。いえいえ別に。」

えーっと、褒める所・・・褒める所・・・

ヤイバ

「いやー、それにしてもお姉さん綺麗ですねー。」

場を凌ぐ為、先輩が適当な事を言う。褒める所を探す為の時間稼ぎだ。

お姉さん

「なに？もしかして君達ナンパ？」

言われたお姉さんは満更でもない顔している。その間に褒める所を見つけた。よし！ここだ！！

ヤイバ

「いえ、ホントにスタイル抜群ですよ。モデルみたいだ。」

リュウガ

「俺もそう思いますよ。すごいスタイルがいいです。」

お姉さん

「まったく、口が上手いねえ。」

お姉さんのふいんきが柔らかくなってきた。もうひと押しだ！！！

リュウガ

「言っときますけど、お世辞なんかじゃないですよ。」

ヤイバ

「だよな！俺たち本気でそう思ってるもんな！」

リュウガ

「全くツスよ！お姉さんホントにスタイルが良くて、まるで——」

ヤイバ

「ああ。まるで——」

大きく息を吸って、先輩と揃ってとどめの一言を告げる。

リュウガ・ヤイバ
「「まるで、エロ本のヌードモデルみたいだ!!」」

その日俺達は、生まれて初めて……初対面の女性を褒めて、
ビンタを喰らった。

つづく

夏の定番その3「海水浴! (ナンパ)」中編(後書き)

後編へつづく!!

中々仮面ライダーの方が筆記が進まない・・・

夏の定番その3「海水浴!」(ナンパ) 後編(前書き)

新年初の投稿です。どうぞ!

夏の定番その3「海水浴! (ナンパ)」後編

<トウガ視点>

トウガ

「全く。兄者とリュウガ先輩、どこ行ったんだ？」

集合時間もとつくに過ぎており、自分は未だに戻ってきていない二人を探しまわっていた。

トウガ

「こちとら寝起きで気分悪いのに……(ぶつぶつ)」

なんて愚痴りながら探していると――

P i r i r i r i !

持ってきていたケータイが鳴った。『やっと見つかったか?』と思
いながらケータイを取り出し、電話に出る。

トウガ

「はい、もしもし?」

||||| コータ視点 |||||

明久

「さっきのはうまくいきそうだったのに、雄二達が余計な事言うか
ら!」

雄二

「いーや、違う! お前と中林がバカな事ばかり言うからだ!」

コータ

「何言っただ！お前ら二人がよく分からん事言っただ！！」

雄二

「自分の事を棚に上げてよく言うな、このボケども！」

明久

「何だこのブサイクども！」

コータ

「やるか！？」

その後、俺達は再びナンパを開始して女性に声を掛けるものの、成功例は一つもなく失敗回数が増えるばかり。

雄二

「……………って、やめておくか。俺達が争うのは不毛だ。」

明久

「……………だね。そんなことしても意味無いもんね。」

コータ

「はぁ……。結局俺達は、モテない男って訳か……」

掴みかかった腕を下ろし、ため息をつきながら呟く。

明久

「うう……。でもまだ諦めきれない。」

雄二

「仕方ない。次で最後にあと一組失敗したら諦めるとするか。」

コータ

「そうだな。随分遠く来たし、帰りながら探すか。」

ナンパに夢中になっていた為、先輩方と別れた場所から遠く離れていた。

明久

「そうだね。そろそろ皆と合流しないとだし。」

コータ

「よし。それじゃあさっさと戻るか。」

雄二

「そうだな。……ん？」

歩きだした途端、雄二が止まり海の方に目を向いていた。

コータ

「？」

俺も気になり、雄二と同じ方向に向くと――

楽しく遊んでいる3人少女がいた。

|||||リュウガ視点|||||

ヤイバ

「……あの右、きっと世界を狙えるぜ。」

リュウガ

「……間違いない。あのお姉さん、きっと未来の世界チャンプだ。」

ビンタをされた後、俺達はそのまま気を失い、ついさっき目を覚ましたばかりだ。未だに顎と膝がガクガクする上、顔には見事な紅葉みたいな形の腫れが出来上がっていた。

ヤイバ

「とにかく、急いで3人と合流して帰らないとな。」

リュウガ

「ですね。もうとっくに時間過ぎてますし。」

早く戻らないと時間にうるさい人に説教させられる。

ヤイバ

「あいつの説教長いからな～・・・ん？」

ヤイバ先輩が何かに気づいて、海の方を向いていると・・・

ヤイバ

「ぐばあー!!」

2回目の吐血をした。

リュウガ

「ちよっ・・・・・・・・ヤイバ先輩!？」

いきなりの吐血に驚きつつ、先輩に駆け寄る。一体何が!？

ヤイバ

「・・・・・・・・・・（チヨイチヨイ）」

するとヤイバ先輩は海の方に指をさす。気になり俺もさした方向に目をやると・・・・・・・・

3人の少女に、海へ連れられるようにバカ3人がそれぞれの女子と手を組んでいた。

リュウガ

「ぐぼあ!!!」

その光景に、俺はたまらず吐血した。

|| || || || || || || || コーダ視点 || || || || || ||

おいおいおい、これは夢か？幻か？ドッキリか？

最後の一組として、さっきの少女達に声を掛けたらいきなり手を組んで海へと連れ出された。

ちなみに女子の容姿は、一人は長い栗色の髪を後ろにまとめてる子。二人目は紺色に近い長髪の子。最後の子はポニーテールをしている子だった。その順で、こっちも雄二・俺・明久とそれぞれの女子と手を組んでいた。

——って、今はそんな関係ねえ！！！（小○よ○お風）

今確かなのは、俺達は最高のひと時を感じていると言う事！ついに俺達に青春がキターーーーー！！！！

そんな感じで俺達のはしゃいでいる間に、もう腰あたりの所まで来ていて、雄二と手を組んでる子の髪が脱色し始めた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
は？脱色？

雄二

『髪の色が、変わった？』

雄二もそれに気付いて驚いてる中、栗色が黒になった子は、髪をまとめていたりボンを外して声を発した。

翔子

『……私は元々こうだから。』

それは、ウチの学年主席で俺のAクラス代表霧島翔子だった。

そして俺は彼女の正体が分かった瞬間、何も考えず海から出ようと動く――

ガチンッ!!

――が、足が何かに繋がれて動かせない。

少女（誰か）

「・・・・・・・・・・。（シュル）」

すると今度は、俺と手を組んでいた少女の髪が抜けて・・・・・・・・いや、正確には付けていたカツラを外して俺の知ってるクラスメイト・・・・・・・・

優子

「・・・・・・・・・・。」

木下優子が姿を現した。

優子

「中林。」

コータ

「・・・・・・・・・・はい。」

優子

「もう一度、スイカ割りしましよ。」

そう言って優子は、どこからともなくボールを取り出す。

コータ

「・・・・あの、肝心のスイカはどこに？」

優子

「あるじゃない。私の目の前に。」

——
そう言って優子はボールを振り上げ、俺の頭に目掛けて振り下——

|||||リュウガ視点|||||

おいおい、どうなってんだこりゃ。何とか吐血を堪えてあいつら3人を見ていたら、その内の二人がAクラスの二人だった。

そして明久と手を組んでいた少女は……

ムツツリーニ（康太）

『……すまない、明久。』

明久

『ム……ムツツリーニ？』

我がFクラスのムツツリスケベの帝王、土屋康太ことムツツリーニだった。

明久

『どうして、こんなことを……？』

明久が悲しい顔でムツツリーニに尋ねる。確かに女装してまで3人を罠に陥れたって、ムツツリーニ自身には何の得もない。なのにこいつは女子に協力したって事は……

ムツツリーニ

『……断ったら、殺される勢いだった。』

……悪い、ムツツリーニ。エロ本で釣られたって思った俺を許してくれ。

明久

『そう。……姉さん達、怒ってた？』

ムツツリーニ

『……右腕一本……』

うおおお、怒ってやがる。だが右腕一本くらいなら許してくれるはず――

ムツツリーニ

『・・・・・・・・右腕一本以外、全部へし折るって・・・・・・・・っ！』

明久

『・・・・・・・・・・。』

どうやら許してくれそうにも無いようだ。心の中で明久に合掌している・・・・・・・・

ピンポンパンポーン！

砂浜に設置してあるスピーカーからお知らせが鳴る。

瑞希

『アキヒサクン？ソコヲウゴカナイデクダサイネ。』

美波

『今日はフルコースでオシオキするから、覚悟しなさいアキ。』

玲（明久の姉）

『姉さんは悲しいです。．．．弟を失うと言う事が。』

秀吉

『逃げるのじゃ明久!!』

愛子

『この3人、本気でキミを——（ザー——ッ!!）』

明久

『．．．．．。』

明久の終焉のお知らせが．．．．。

ムツツリーニ

『．．．．．明久。．．．．．今まで楽しかった。』

明久

『いやだあああああああああ！！！！』
（泣）

明久はそう叫びながら、母なる海へ向かって行った。

リュウガ

「……さて、ヤイバ先輩。」

ヤイバ

「ああ、帰るか。」

ピンポンパンポーン！

サクラ

『兄さん達？今何時だと思っているんですか？』

トウガ

『さっき美波から連絡もらったらナンパとは……こっちは探してたというのに……今度は下のキウイを割ろうか？』

ヨーコ

『こつちもナンパ掛けまくるバカを片づけてたけど……まだ残つてた様ね。』

クルス

『ヤイバさん達逃げて下さい!!』

シモン

『この人達なんかヤバイ鈍器や銃を——（ザー——ッ！）』

と。さて。

リュウガ

「明久、待ってくれええええええええええ！！」

ヤイバ

「俺達も一緒に行くからあああああああ！！！」

雄二視点

翔子

「・・・・・・・・雄二。」

雄二

「・・・・・・・・はい。」

翔子

「・・・・・・・・正座。」

雄二

「え？ いや、でもココは・・・・」

翔子

「・・・・・・・・正座。」

雄二

「いや。ココは海だから・・・・」

翔子

「・・・・・・・・モウイチド、イワセルキ？」

とぷん。
（海に頭まで浸かる音）

海の底は、暗くて静かで―――寒かった。

夏の定番その3「海水浴!」(ナンパ) 後編(後書き)

特別問題…海水に含まれる主な成分は水と何でしょう。

姫路瑞希・飛鳥あさひの答え

『塩(塩化ナトリウム)』

教師のコメント

「正解です。」

雷シユンスケの答え

『お塩!』

教師のコメント

「よくできました。」

吉井明久・赤木リュウガ・中林コータローの答え

『後悔と懺悔の涙(泣)』

教師のコメント

「何があっただんですか?」

イメージEd…バカテスにつ!の二期ED『バカと個室と孤独飯』
聞きながらも一回呼んで下さい。

今回は、夏のひと時のスポーツ。お楽しみに!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8252s/>

番外だよ！全員集合！！

2012年1月5日18時50分発行